

野生と生きた88年

その9: 新居を建てる

高橋 清 (29C応化)

1983年、僕が職を失っても、幸い上の2人の娘達はアルバイトや不定期の職を見つけ、専門学校や大学に通いながら半分独り立ちしていて、生活は危機には無かった。僕はカナダの満ち足りた生活に区切りをつける気にならず、まずは現状の呼吸器系の健康問題から抜け出し、体調を安定させてからカナダで新しい職を見つけようと思っていた。幸い、健康状態は、ある程度新薬で抑えられ、安定の兆しが見えてきたのを機に、呼吸器疾患に対応できる新居を建て、新しい生活の基盤を作ろうと決心した。そんな強気も「健康を取り戻したら必ず戻って来い」と激励してくださった社長の声に頼っていたのは否めない。今それを思い出すと、既に他界された社長、市場から失せてしまったライヒホルドカナダ社にお礼の言いようがないと思うこの頃である。

家の設計については、先号「その8」で触れたが、家の真正面、約100キロ南東にそびえる3,286メートルのMt. Bakerを望む家の建設が始まり、BC大学のエンジニアリングの教授の助けを受けて完成した。数ページにわたる家の設計図を市内の設計事務所に持ち込み、正式な製図を依頼すると、翌日電話があった。内容すべて法の規律を満たしているのも、そのまま仕上げる、とのことで、一週間後に完成した。大学教授から紹介された建築士は、近代の冷暖房の可否に強い興味を持っていて、設計を気にいってくれた。この地域は1,900年前後に、約4平方キロメートルの精神病院が建設されるまでは、すべてが自然林で、新居の辺りは最近までは自然のままであった。

我が家の敷地は奥行き35メートル、幅12メートルで、家は道路から約12メートルほど下がった所から奥に建つが、問題は、土地が道路から平均約15度前後の傾斜で上がることだった。設計は当地の家の構造の基準に立って、地下に車のガレージと不要不急の部屋、その上の階にリビング、ダイニングと勝手、そして斜面に多い2階建て以上の家屋では3階が寝室になっているのが普通、幅約12メートル、奥行き10メー

ルの小さな我が家も基本はそのように設計した。しかし、工事が開始されてすぐに問題が発生。庭の中ごろから上に向かって巨大な岩盤があり、地下室を予定通りに建てるには、ダイナマイトで爆破が必要となり、巨大な経費がかさむことが分かった。急遽その場で設計を変えて地下室を半分に減らして車2台分のガレージのほかは寝室一室のみ、屋根の構造もそれに従って若干変更せざるを得なかった。後になって、自然地に家を建てる場合には、このような変更は日常茶飯事であることを知った。家の建設は、基本骨格の建築時を別として、3名の作業で行われたが、木工を昔から趣味にしていた僕は快く受け入れられ、時間のある気分の良い日には入り浸って、仕事の見学や小さな仕事の手伝いを担当した。

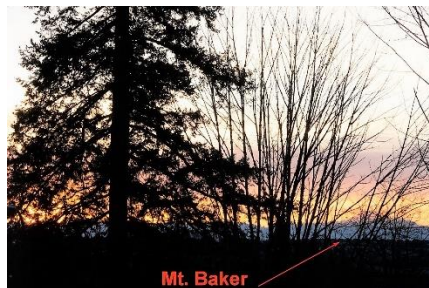
家の構図の基本は、清浄空気を取入れる家。カナダでは当時からすでにガス燃料にかなりの批判があった。勿論僕の設計の基本は電気エネルギーのみに頼り、エネルギー節約でこの北国で最も基本的に考慮される保温構造である。当時の一般家庭の外壁は4インチの断熱材を使用するのが普通であったが、保温を考慮して外壁を6インチとし、当時最も有効とされたガラス繊維の断熱材ですべての外壁を覆った。もっとも熱の喪失の多い天井は6インチの断熱材を使った。外壁の内側は5ミクロンの塩ビフィルムで覆い、全ての間隙は粘着テープで接着、空気の移動を防いで、外気を特殊の、年2回の清掃の必要のフィルターを通して導入。したがってドアを閉めると許容の範囲の気密性があったかすかに耳にこたえる。

一般の家よりかなり大気処理の手間をかけた我が家だが、それでも5か月目には居住可能となり、1984年のクリスマスイブに、未完の部分もあったが、建築家の了解を得て入居した。暖房は電気を使った遠赤外線シートのためごく自然で、快適な温かさ、そして夜には建築士の特別の推奨によって取り付けた、ノールウエー製の薪ストーブに、山のように蓄えておいた建材の端切れで焚火、かすかな木の燃える香りは、即座に仙の倉山荘の冬を思い出したものである。まさに天国に登る心地だった。年が明けると間もなく建設工事が完了。1月初めに市役所に届けると、市庁舎の係の人から面白いコメントを貰った。この家はこの住宅団地約300軒の住宅の中で一番面積の小さい建物(こちらの標準で千平方フィート)なのに、価格が平均より高いのはなぜ

だろう、と言う。僕は空気清浄機や暖房設備などの特徴を得意になって説明したものである。

新築の家に住んで、すべてが朗報だったとは言えない。まず土地の岩盤のために地下室が半分になり、大好きな木工の仕事をする空間を考えなくてはならなかった。今は所有車は1台なので、2台用のガレージの半分以上を木工の仕事に充てているが、当時は妻も車を持ちガレージにスペースは無かった。そしてもう一つ、設計にあたって全く考慮しなかった問題は、僕の肺気腫が応える家の造りだった事。車をガレージに入ると階段を登って1階のリビングに入る。そこにはこちらの普通の家の様に「家族用居室」(リビングルーム)と別に「応接室」がある。これも岩盤の影響でそこに階段3段の高さの差があるが、これは問題では無い。(ちなみに、市役所では、この3段の階段を法的には1階と数えるとの事。)さらに寝室に行くにはもう一つの階段を登る。僕の呼吸器疾患ではこの階段を2回分一度に登ることが大変な苦勞で、当時は各階段毎に一度途中で止まって息をつかなければならなかった。この難問は意外にもその後、家の前の精神病院の裏の森を定期的に散歩して体力をつけた事によって、解消できた。家の前の道を隔てた坂の下には、当時このBC州でも最大の約4平方キロメートルの土地を持つ精神病院が建っていた。一時は1,200名を超す精神病患者のケアが行われていた貴重な病院で、僕もその後、この病院が閉院される1993年までの5年間、患者介護のボランティアをした所だ。新居に引っ越した当時は、病院の野生の裏地に足しげく通い、野生の鹿、コヨーテ、ラクーン、黒熊などとの顔合わせを楽しんだ森である。

こうして思いどおりの我が家が誕生。その近隣を含めた環境も期待どおりに歓迎的で、野生動物、野生の森、そして解放された病院の内部は大いに利用して体力造りを初めて2ヶ月が経過、予期以上の体調の改善をトロントの本社の社長に電話で報告して、お礼を言うと、予期もしなかった「すぐに会社に戻って来い」との嬉しいお言葉を頂いたのである。(以下次号)



我が家のリビングルーム正面に木の間を通して Mt. Baker が見える



屋根の上から見た冬の Mt. Baker



近くの森は原生林



通りの向かいから見た我が家 (真ん中)



近隣の家並みは皆大きい



家から5分も歩くと東に見える Golden Ears Mt. の山並み



春から秋まで定期的に裏庭を訪れる熊たち